

---

# リリカルなのはJudgement ~ 蒼天の剣 ~

絶望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのはJudgement〜蒼天の剣〜

### 【Nコード】

N3172BA

### 【作者名】

絶望

### 【あらすじ】

とりまありリカル世界を主体としたごちゃ混ぜ…時系列はFor  
ce開始半年くらい、展開はほとんどオリジナルです…

普通の勧善懲悪とはまったく正反対、管理局とかの闇をどんどん出すつもりです…

その意味ではある意味ダーク系？でも最後はちゃんとハッピーEDにする予定です…もち希望があればダーク系EDも考えますが、どうしようか^^；

## 序章 始まりのクリスマス(前書き)

先に声明します、ユーノをハーレムするのは意図あつてのこと  
決して、作者のエコヒイキではありません、決して！

## 序章 始まりのクリスマス

第1管理世界「ミッドチルダ」 特務六課隊舎 司令官室

「いやな、私だつて分かつとるんやけどさ……」

二十代半ばの女性はコーヒーを飲みながら、

「みんなも疲れとるし、今は魔法も使えんし……」

家族であり、部下である医療班長のレポートを机の上に置き、

「今日はそういう日だと割り切れとるんやけど……」

つい先ほど降り始めた雪を窓越しに見つめ、

「……せやかて、なんで留守は私だけなんやあああ！……！」

以上、八神はやて司令の心の嘆きでした……

……

正確に言うと、特務六課隊舎はそれなりに騒いでる。

何せ今日はクリスマス・イヴであり、比翼の番いのない者はパーティーをしている。

……楽しいかどうかは別問題として。

しかしながら、メインメンバー……即ちスターズ、ライトニング、ロングアーチは隊長以下全員 言わずともはやて除いて 今日非番である。

別段不思議な事ではない、特務六課は今現在、実質上機能していないからだ。

半月前の作戦を成功に収まり、目標も全員逮捕した代償とも言うのでしうか。

突入隊である特務六課の戦闘要員は皆酷い魔力ダメージを受け、湖の騎士シヤマルの見立てでは全治一ヶ月、皮肉にもそのおかげで半ば休暇体勢が許されたのである。

「ええと…」

傍らで本を読んでいるリインフォース？はいじけてる主を一瞥し、

「ヴィータちゃんはそのロリコンバカとデートで…」

シグナムはヴァイス陸曹の家で…あ、ちなみに泊まる予定です…  
ザフィーラは第98管理外世界リンディさん…アルフさんの所

で…

ティアナはスバルに誘われてナカジマ家で…あれ？…

エリオとキャロは第34無人世界で…うわーエリオすごいです…

トーマはリリィと…」

「もうやめて！どうせ私は行く当てがないもん！カリムと酒でも飲みに行くもん」

「あはは…行かないほうがいいと思いますよ」

いきなり開くプライベートチャンネルに、

「うわ！…なんや、ロツサかい…どいう事？」

この際、背景が明らかにそっち系ホテルの一室で、緑のロンゲが身に付けているのはバスローブである事は敢えて突っ込まない…と



予想外のダメージを受け、ライフポイントが限りなくゼロに近い主の頭を撫でるリインフォースに、その主は最後の希望に似た事を聞く。

「なのはちゃんとフェイトちゃんは、もちろんヴィヴィオと一緒に家にいるよな？な？」

「はい？ヴィヴィオちゃんなら、アインハルトさんと特訓に行くって…そう言えば、ママたち頑張ってたと言ったようなひゃっ！」

さつきまでダメージ硬直中のはやてがいきなり立ち上がり、「嵌められた！」とか言いつつ外出コートを取った。それと同時にリインフォースは広域探索魔法の起動を半身たる蒼天の書から感じ取り、呆れたように溜め息を吐く。

一方はやてと言えば、歩くより走る、今にも市街地で飛行する勢いで扉をくぐり、

「やはり一緒にいる…抜け駆けはなしって言ったのに！そないなら私も遠慮なんてしまへん、待ってるやユーノ君、今行くでええええ」

以上、八神はやて司令の魂の叫びでした…

……ミッドチルダ時間零時、鐘の音は日付の変わりを告げ…子タヌキのクリスマス戦争は、始まったばかりである……

12月26日1100時 特務六課隊舎 食堂

すっかり人間サイズに慣れたリインフォース？は少し早めの昼食

を取っている。そしてその隣で同じく食事をしながらリインフォー  
スとおしゃべりしているのは金髪の麗人。

「よう、リイン！帰ってきたぞ」

「ヴィータちゃん、皆さんもお帰り…休暇楽しかった？」

「ああ、留守ご苦労だったな」

「ただいま戻りました」

「は…はくしゅん」

「あらアギト、風邪？」

いつも喧嘩しているが、二人の仲は実際それほど悪くない、むしろいいほうだ。

「ああ…ちよつとな」

「だから中に入れと、ヴァイスも拒絶しないと思うぞ」

「んなどこ居てられるか！外にいても聞こえるんだぞ！」

「あ、や…その、すまん」

「あはは…」

相変わらずこの手の事に初心な烈火の将に、リインは笑うしかなかった。

「エリオ、キャロ、ちゃんと休んだ？」

長い片思いが実ってから少しは進歩したとは言え、未だに親バカ  
のフェイトである。



「はい！楽しかったです！」

「僕は…なんとか、としか…」

「あは、あははは…」

艶やかな竜使いとやつれている竜騎士に、リインはやはり笑うしかなかった。

「そうやー、はやては？」

「昨日ちよつと夜更かしたので、まだ寝てますです」

「主が夜更かし？テストタロツサは何か知らないか？」

「えと、その、私が最初に潰れたから、なのはとはやて二人で頑張つて、その…」

「「??？」」

もじもじして意味不明？な返事をする我らがフェイト執務官と、頭にクエスチョンマークを浮かぶ一行に、リインは苦笑いを浮かべるしかなかった。

一方、同時刻聖王教会

「騎士カリム、無断外泊、それも二泊の朝帰りについて…」

「丁度よかったわシャツハ、あなたとロツサの事を聞きたかったのです」

……

「…此度は不問で手を打ちましょう」  
「ええ、そうしましょう」

微笑みながらガシツと握手する二人の女性の麗しい友情？を見ながら、傍らで紅茶とケーキを嗜むヴェロツサ査察官は思わず半眼して、

「それはいいけど、せめて相手が誰くらい教えてよ、姉さん」

「そうね、もうバれてしまいましたし、潮時…かも知れませんが、実はロツサとシャツハもよく知ってる人よ…」

柔らかく、そして幸せそうな笑顔で語りだすカリム、半分以上はのろけとも言えるその話の中心である人物こそ、この物語の主人公である…

だがカリムは気付いていない。一年に一度しか使えない能力、次に使うのは半年以上後のはずの能力…預言者の著書は何の気配もなく、書き終わったページを上書きした…否、予言の結果が変わったのではない、次元世界の事象が誰にも気付かれず、変わったのだ…

永遠なる者が動き出し 漆黒の鐘は裁きの音を鳴らす

赤き星が大地を照らし 法の船は衣を解かれる

全てのページが揃い 観察者は始原の本を開く

光と闇が一つになる時 放浪の牙は一つ碎かれる

リリカルなのは Judgment、始まります……

## 序章 始まりのクリスマス（後書き）

予言者の著書はなんて言うか…シナリオの予定そのものだねorz

## 断章 世界の陰で（前書き）

とまあクリスマスにおける予言変更の原因について、今度はその時  
水面下で起きたことを書いた

## 断章 世界の陰で

始まりはいつも静かで、地味である。

- 第1管理世界「ミッドチルダ」 ??? 書斎 -

夕日に照らされるその書斎は、人を驚かすのに十分な大きさである。

書斎の主人は今、客人とお別れをしている。その客もそれなりの容姿ではあるが、書斎の主人：180を越えた長身に細マッチョの体型、相乗効果をなす整ったオールバックと普通に美形とされる顔…それらと比べれば、あまりにも不憫である。

「ではこの件についてはこちらが処理します…しかし、貴方は本当に本が好きですね、やはり魔法のデータベースよりも、紙を手で取るほうが楽しみなのか？」

「…個人的な趣味だ。人はいつも、書籍がもたらした物など気にせぬ。私にとって、書物を読むのは最高の享受だよ…もし貴公の借りたい本があれば、どうぞご随意に」

「いやいや、知ってる通り仕事に追われる身ですので、遠慮しますよ」

……

「やれやれ、実に下らない政治家の代表だな」

認識妨害の魔法を解き、男はどこか疲れた様子で、オーダーメイドの安楽椅子に腰を下ろし、窓越しにミッドの中央市区を眺め始めた…

「ご主人さま、新しい情報が入りました、如何なさいますか？」

流れる水のようなその声は柔らかく清らかで、いつものように男の心を癒してくれる。

「ふむ…聞こう、アリア」

男は頭を回し、左斜め三步後ろに立っている、膝の裏まで伸ばしている綺麗な銀髪を持つメイド風の女性に視線を投げた。

「はい、ご主人さま。まずは先日、管理局の作戦により壊滅状態となった第8研究基地の被害状況が完全に把握しました。地上防衛部隊、第八世代量産型ガジェット5362全滅。特務六課の侵入により地下式基地は全壊、責任者以下は全員逮捕され、培養装置212、レプリカレリック553、そのほか機材被害が多数でございます」

「ほう…六課の若造もやるな…」

「ふっ…」

アリアとは別で、笑いを我慢しきれず吹いた声を無視し、男は続く、

「で、その若造どもはどうした？」

「部隊長を除く戦闘員は魔力ダメージ大、前線復帰には最低一ヶ月と思われませう」

「全部休暇入りか…まっ、第三期機人と人造魔導師をあれだけ捨てたから当然か」

「はい、AAAランク22名及びオーバーSランク四名による特務六課との総力戦、相打ちの結果はご主人さまの計算通りでございます」

「ふん、何が計算通りだ…私はあのオリヴィエ嬢のクローンとイングヴァルト坊の子孫も戦力としてカウントしたのだがな」

「その件についてですが、適合者の参戦が原因と思われませう」

「…例の？私が凶鳥を狩る間に殺せと命じたはずだが？」

「はい、確かにそう仰っております。ですが、潜入したミス・Dから、騎士シヤマルの治療により安定したとの報告を受け、念のため一時保留とされました」

「はっ、住民がそんな事できるものか。あの子が動いたか、それとも…まあよい、それなら放っておけ…それと、彼女にはこのまま潜伏しろと伝え」

「畏まりました。次に、お客様たちの返事でございます…」

……



- 第107管理外世界「ガーランド」 ??? -

部屋の中には、五人の男女が入る。

右目に大きな傷跡を持つ三十代前半の男。

少し長めの紺色の髪を七三分けした青年。

優しい目付きをしている栗毛の青年。

ルビーの瞳と癖毛が印象的の少年。

そして、輪の中央に居るのは…

彼らの表情は、辛そうで、悲しそうで…目的がなんであれ、相手が誰であれ、彼らがこれからやろうとする事は命を奪うだろう。

しかし、彼らの目に迷いはない。

「 のために、我々が世界の敵になりましょう」

第37無人世界「レオルラ」 西部山脈 大型飛行物体

それはブリッジというより、どこかの宮殿の玉座の間に見える。

中央の艦長席…金の玉座に座っているのは20代の男、艶のある黒い髪と長いまつげ、薄い笑顔と紫の瞳が芸術的なコラボレーションをなす。

その斜め後ろでは、一人の女性が少し小さめの…そう、例えば妃が座るようなもう一つの玉座に靠れている。腕の中に収めている変

なぬいぐるみは普通にシユールであるが、なぜか緑の長髪を下ろしている「妃」と調和の美をもたらす。

玉座の間に二人以外には四人が居る…

王の右側で目を閉じているにも拘らず、全身から威圧感を放つのは若き騎士。

妃の左側で艦の進路を見つめ、凜とした姿が人を惹きつくは麗しきバルキリー。

そしてモニターで艦の操作全てをこなす研究者風の男性と女性。

「人の駒になるのは嫌いだが、まあよかるう…あの男の目指す世界、見せて貰おう」

- 第23管理世界「ルヴェラ」 南部海域 アンノウン飛行物体 -

それは人の形をした、真っ黒な何かである。

サイズは人大差ないが、機械のようなフォルム…いや、機械そのものである。

「フツ…今回の転生は、実に運がいい…」

「Ich bin daf?r (私もそう思います)」

「あの男の指示が来るまで色んな世界を楽しむのも一興…なに、今まで彷徨った時間と比べれば、大したことではないさ」

「Ja」

「ふむ…これで第一と第二段階の戦力は確保したか…」

「そうなります…それではご主人さま、お出掛けの時間ですので…」

男が安楽椅子から立った同時に、その達観したような雰囲気も消えた…外見の年相応、と言うより今にも小躍りでもしそうな感じをしている。

「時にレア、さっきは何が笑えるのかね？」

主の問いに答え、金色のツインテールを揺らす、ゴスロリ風の少女がどこからもなく現れ、鈴のような声が部屋に響いた。

「だってお兄さまが若造とか言うから、ぷっ…あはは…」

「…確かにあいつらと比べたら私もまだ若いが、それでも36を生きて来たのだから」

「でもお兄さまは、その若造と同年代の人に恋したんでしょう？  
ねーお姉さま」

「む…それとこれとは別だ。それに…一時の夢だけだ」

男のやるうとした事を知れば、間違いなく敵同士になるのだろう…  
一瞬苦笑を浮かべ、再び窓越しに灰色の空に目を向け、

「今日は、降りそうだな…行ってくる」

「行ってらっしゃい、お兄さま」

「お気を付けて下さいませ、ご主人さま」

そして、男は書齋を後にし、金の少女と銀のメイドは空間に溶けるように、なんの気配もなくどこかへ消え去った…

……

## 断章 世界の陰で（後書き）

いきなりラスボスのご登場です

今回は前期〜中期の敵キャラを登場させました、皆お馴染みですね

^^

一章 始まりの音（前書き）

オリ主登場の章だ

## 一章 始まりの音

第1管理世界ミッドチルダ 特務六課隊舎 司令官室

部屋には三人の男女が居た、そして部屋の主は顎を組んでる手で支え、

「第68管理世界駐留部隊全滅、機動三課も半壊…か」

「はい、死者重傷共にゼロとは言え、復帰できる魔力の回復は最低でも半年だそうです。少数は自分が別任務に連れて行ったので無事ですが、三課は実質上解散です」

応えるのは一人の男、見た目は二十代後半、身長はフェイトより頭一つ分上、少し癖のある黒髪は乱れを感じない程よき、目付きも表情も柔らかい。顔は歳の痕を見えるがまだ現役の美形で、瞳の色は身分を表す虹彩異色、髭は見えない様に剃っている。

「一見隣のお兄さんかと思わせる風貌ではあるが、

「分かりました、では本日をもって、ナイトハルト・ラング二等空佐以下二名は特務六課に編入する…これからよろしゅうな、ナハトやん」

「はっ！」

ここで時間を数日前…新暦82年1月12日に遡る。

第68管理世界「ヴィンセント」…またの名は「貴族の庭」、管理局に籍を置いてる者であれば噂くらいは聞いた事あるだろう。

全次元世界の権力者たちが出資し、一から作り上げた楽園…が、そこに行けるのもまた、各分野のトップエリート…端的に言うと、権力者にとって価値ある者のみである。

駐留部隊は許されたが、軌道上に母艦を置くと言うギリギリの譲歩であった。

……

12日午前0600時、一隻の艦船が太陽と共に姿を現した。

金と権力に毒されたとは言え、彼らはバカであつてもただのバカではない。相手は単独で警戒網を潜り抜けるほどの技術を持つと判断し、私有の防衛隊を出撃させながら軌道上の駐留部隊との通信を繋ぐ。

駐留部隊司令官エルガ・アドリオンは即座に第二種警戒態勢を発令し、着任以来始めての事件と呼べる事件に備えた。

120秒後、艦船から航空部隊が発進した事が確認され、エルガはそれを敵艦と認定した。全戦闘員計62名に出撃を命令し、ミッド式空戦AAAでもあるエルガ自身も先頭に立ち、前線指揮を執る。

記録映像からすると、敵はガジェットや戦闘機人でもなければ、魔導師でもない、機械と思われるシルエットを持つ人型…そう、機械人形に似たそれは半分空から接近し、半分は地上に降りて、脚部



のローラーらしき装備で突撃を行った。

……

管理局本局が最後に受けた通信は駐留部隊による戦闘行為開始の報告であり…

…その僅か十五分後、観測センターからの「中規模次元震発生」と共に、第68管理世界の消失を確認された。

奇跡的に、駐留部隊及び、巧みにも周辺海域で巡回、参戦した特務三課メンバーに死者は出ていない。三課司令の陳述のよると、相手は殺傷設定を使ったが、致命傷を避け魔力ダメージによる無力化を狙っていた。その後、何らかの魔法で魔導師隊は母艦ごと強制転移魔法により他の世界に放り出されたとの事だ。

次元震の発生、世界一つの消失、管理局は今まさに混乱の最中である

では時間を今に戻りましょう。

返事とともに、完璧とも言える軍礼をするナイトハルトを見て、はやては微笑んで、

「そんな堅いせんでもええよ、六課では皆家族みたいなもんやから」

「いやしかし…」

「もうーだったら私もラング二佐殿と呼ぼうか？」

満面の笑みを浮かぶ子タヌキ、その裏は知る人ぞ知るのである…

「……分かった、俺の負けだ。これからよろしく、はやて」

このやり取りを通訳すると、

正式に軍隊式扱えすれば、二人は同階級だがナイトハルトの方が先任であり、誤差レベルではあるが彼が上、そのような存在は少なかれ部隊の運営に支障をもたらすだろう…

…と言つのは建て前であつて。

実のところ、この子タヌキは「ほほうーええのかな…後でなのはちゃんとフェイトちゃん、シグナムたちも混ぜてい・ろ・い・ろ、お話しようか？」と目が言っている。

…あの面子が素敵な笑顔で「二佐殿」と呼ぶ光景はあまりにも見たくないな…なにより、カリムを姉のように慕うはやてからそう呼ばれるのは面白くない。

「うん、よろしい…ヒルデさんもよろしくな」

「こちらこそ」

部屋に居る最後の一人、ナイトハルトの右側に立っている、腰を超える水色の髪をポニーテールに纏める女性は氷のような無表情で小さく頷き、返事をした。普通なら無礼とも取れる行動だが、長い付き合いであるはやては意に介さず笑顔を見せた。

ん？言わなかったか？ナイトハルトは捜査官時代のはやての上司であり、教育担当である。自然にその融合騎兼、副官のヒルデもその頃からかのお付き合いだ。

まあナイトハルトの詳細は後回し、とりあえず言えるのは、闇の書事件の関係者は全員彼と交友関係である。機動六課時代は仕事の都合で会う機会がなく、ティアナやスバル達は噂程度しか知らない。噂は知ってるけどね。

今回三課が解散し、残った少数はバラバラに各部隊に転属したが、騎士カリムの推薦もあり、ナイトハルトとヒルデは六課を申請したわけだ。役職は三課に居た時と同じく、戦術顧問で落ち着いたが：本人曰く「前線の方が好む」という事で一応前線指揮も任された。

ともかく、こうやって六課は新たな戦力が補充され、メンバーの魔力もほぼ通常値まで回復し、第六特務機動隊は正式に前線復帰した。

……

「とりまあ、今日から仲間になるナイトハルト・ラング二佐とヒルデ准尉の二名や、皆も仲良くやって行こうな」

「ナイトハルト、ナハトとも呼ばれてる、よろしく」

「ヒルデだ、よろしく頼む」

朝会で二人を紹介し、一通りの話が済んだ後、ナイトハルトははやてに拉致された。

そしてなのは、フェイト、そして八神ファミリーが休憩エリアのサロンに集まり、久しぶりの再会を祝った。

昔話が盛り上がる最中、はやてはふと爆弾を投下した。

「んで、カリムとはどこまで行ったん？」

カリムから「バレた」と言われたのである程度覚悟したが、まさか真つ向から直球で来るとは予想外らしく、ナイトハルトは一瞬呆然した。そして少し赤い頬を掻きながら、

「今すぐは無理だけど、近い将来でちゃんとけじめを付けるつもりだ」

本気だと悟り、「そうか」とはやて笑顔で頷いた。

なのはとフェイトは祝福をし、

シグナムとヴィータは檄を飛ばす、

シヤマルとザフィーラは無言だが、微笑んでくれた。

…すぐ側から伝わってくる黒いオーラは無視しよう…無視するしかない。

ナイトハルトは感謝の言葉の代わりにしっかりと頷き、しばらくして問いかけた。

「はやてたちはどうだった？ユーノのやつ、ちゃんと選んだか？」

「にやはは、それがね、なかなか落ちなくて」

「ユーノは三人が好きで選べないような男に資格はないと言っけど」

「せやからこっちから押しかけて四人一緒にええって言ってやったわ」

常識に考えるとかなりカオスな状況を、どこか嬉しそうに語る三人娘を見て、ナイトハルトは少し呆れながらも、どこかでこれが必然だと納得した。

…だってこの三人のどれも、二人を残して幸せになる事は出来な

いだろう。

次第に話題が烈火の将と赤の鉄騎の恋に移り、ナイトハルトは二人を盛大にからかった後、真つ赤になった二人に古代ベルカ最上級の祝福を捧げた。

……

波に止まる時がなく、世界に平穏はありえない。

その場の全員…いや、役職を持つ全ての局員に、一つのメッセージが届いた。

「査察官総長ゲイル・アルデイス中将、オフィスで死亡、他殺と判定」

顔を締める一同を見て、ナイトハルトは嵐の到来を確信した…

……

第68管理世界の事件が収まらずのまま、管理局中将クラスの暗殺が世界中に知らされ、人々は混乱しながらも変わらない日常を送っていた。

そして何の予兆もなく、一本の強制通信が全ての管理世界をオーブンチャンネルで介入した…介入方法は勿論、発信源すら見付からずに…

画面に映るのは玉座に座る一人の若い男、

「次元世界で生まれ育った全ての者に告げよう。」

私達は、黒の福音。ブラック・エヴァンジェル ロストロギア級デバイスを所有する、私設武装組織である。私達の行動目的は、世の不条理を裁き、弱き民を守ることにある。

私達は競争を否定しない。しかし、一方的な蹂躪は断じて許さない。撃つていいのは、撃たれる覚悟のある者だけだと、私は思う。

麻薬、娼館、殺し屋。第68管理世界は金と権力を楯に、世界の闇を培う土壌と成り果てた。故に、それとそれを作り上げた者たち諸共、私達が裁いた。

管理局査察総長ゲイルはそれを知りながら、容認し利用した。故に、私達が裁いた。

今、ここで、私は宣言する。経済・政治・軍事、どのような方法であろうとも、民に害をなす者に対し、私達は武力により然るべき裁きを与えよう。

その者たちを？助する組織、企業、世界。時空管理局の一部も、私達の裁く対象となる。

強き者よ、我らを恐れよ！弱き者よ、我らを求めよ！私達は黒き福音、世界の陰で祝福の鐘を打ち鳴らす者。

この広大なる次元世界は、私達黒の福音が、裁く！」

## 一章 始まりの音（後書き）

とまあこんな感じ

宣言部分は00とギアスを混ぜてみた^^;

次はオリキャラ、デバイス、レアスキルを紹介しようかと…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3172ba/>

---

リリカルなのはJudgement ~ 蒼天の剣 ~

2012年1月14日01時51分発行